〔書評と紹介〕

鐘江宏之著

『律令国家と万葉びと』

福田　友之

本書は、小学館創立八十五周年記念出版「全集　日本の歴史　第三巻」として刊行されたもので、扱っている時代は奈良・平安時代である。本書の構成及び内容はつぎのとおりである。

はじめに　立ち上がる国家
第一章　文字、時間、歴史
文字を使う（日本列島に登場した文字―中国との外交と文字―四世紀以前の出土文字資料―文字を記す方法―文字を記した人々―文字の使用と社会）
時間との関係の始まり（暦を使う―暦の利用―最新の暦技術への切り替え―時計の導入―時を知らせる―時間を記録する―年号制の開始）
日本の「歴史」の始まり（歴史書の始まり―『日本書紀』の成立―「倭」から「日本」へ―国家の歴史としての歴史書―天皇制の確立―天皇統治体制を支える「歴史」の創成―歴史認識の再生産）
第二章　東アジアのなかの日本列島
朝鮮半島諸国とのつながり（朝鮮半島諸国と鉄資源―刀剣に象嵌された銘文―木簡と文字文化―朝鮮半島の漢字用法の影響―遣隋使の時代―百済の滅亡―白村江の戦い後の新羅との関係）
朝鮮半島方式から中国方式へ（八世紀に手を加えられた改新之詔―大宝律令施行における路線転換―年号の開始―大宝の遣唐使と平城遷都―書風も変わる）
東アジアの八世紀と日本（唐・新羅・渤海―遣唐使の展開―新羅との外交―新興国、渤海との外交―桓武天皇と渡来系氏族）
第三章　「日本」の内と外
渡来人・帰化人と日本社会（渡来人・帰化人の波―五世紀の渡来者たち―朝鮮半島の倭系人―仏教の始まり―移民と東国社会―百済王氏と旧百済出身氏族―技術者集団の行方）
唐における日本人と唐からみた日本（遣唐使と留学生―留学僧の辛苦―中国での名のり―唐人の見た日本）
奈良時代の国際化（日本社会のなかの異国人―外国語の世界―異国の調べ、異国のもの）
蝦夷の地と「日本」（七世紀の北方社会と「日本」の交流―そもそも蝦夷とは何か―移民と蝦夷の東北社会）
隼人・南島・西海と「日本」（隼人社会との交流―南島との交流―南の果てと西の果て）
第四章　国家と役人
役人の始まり（服装と作法―出勤の始まり―常勤と交替勤務、中央と地方―貴族と下級官人）
国家と技術の独占（手工業技術者の確保―国家の組織と技術の独

占）
役人と支配の言葉（目に見せる文書―声で聞かせる言葉）
紙と木の書類（役所と書類―木と紙の併用―木簡の形と使い方―紙の形と使い方）
広まる書籍（初学書としての『論語』『千字文』―『文選』と『王勃集』―『杜家立成雑書要略』）
「先進」的律令制（戸籍・計帳をつくる―律令制と「はんこ」の文化―数値の不審な書類）
国家の軍隊の創出（軍団の成立―官人たちの武装化―衛士と仕丁の身の上―防人と鎮兵）
国家にとっての祭祀と宗教（神祇と祭祀―教団道教は導入されない―仏教と日本社会―国家による仏教興隆―写経と写経生）
国家機構の末端（国郡里、国郡郷―郡家と地方寺院の誕生―「神の火」？　じつは…）
第五章　万葉びとの生活誌
万葉びとの衣食住（日常の服装―万葉びとの食べ物―住居と集落）
子供と社会（子供の誕生―犠牲にされる子供―社会に生きる子供）
古代の名前（名前をつける―生活のなかの略称―姓のある者とない者）
負担と労働（人々への負担―大量生産される調・庸物品―課された春米労働―逃亡と浮浪）
一年の過ごし方（農事と季節の把握―春―夏―秋―冬）
集落に入り込む文字（集落のなかの文字―サインを書かされる―命令を伝える文字）
人々の遊び（双六と囲碁―踏歌と歌垣）
病気と社会的弱者への対策（病気とその対処―社会的弱者への対応）
民衆仏教と人々の信仰・世界観（国家仏教と異なる「仏教」―まじないの世界―死と葬送）
第六章　開発と環境問題
開発と大義名分（開発と祭り―地方豪族と開発）
道路と馬（直線道路の建設―馬と駅家）
都市の建設（都の建設と古墳の破壊―水害をおさめる―強制移住と宅地の指定、都市住民の誕生―大寺院と九重塔―土木工事と人々の逃亡―地方都市の建設―地方社会と国分二寺―都市の衛生問題）
古代の自然破壊（都城の建設と森林破壊―塩山の争論―陶邑の山争奪）

以上、本書の構成と内容について、章節とほぼすべての項目を紹介したので、これを見ていただくだけでも本書の内容や著者の意図するところが理解できるわけであるが、このなかで、とくに評者が興味深く読んだ内容を中心に紹介したい。

著者は、まず「はじめに」で、五世紀から九世紀初頭までの四〇〇年を、日本という国家が確立し、整えられていく過程としてとらえ、この国家のもとで、人々がどのように生き、暮らしていたのかという視点を

明確にして執筆への思いを述べている。以下、各章ごとに述べる。

第一章の「文字、時間、歴史」では、文字の伝来から大宝元年（七〇一）の元号制の採用を経て、養老四年（七二〇）の『日本書紀』の歴史書編さんまでを述べている。このなかで、文字は、弥生時代に中国から倭の社会に伝わったのち、六世紀中ごろになって、人々を登録し管理するといった支配・行政上の必要性から用いられるようになったとし、文字を記すために中国で一般的に使われた木・竹のうち、倭の社会では竹が使われなかったのは、経由地の朝鮮半島で木の筆記文化が選択・醸成されたためであるとする記述は、とくに八世紀以降に日本各地で使われた木簡を考えたとき、非常に興味深いものがある。

第二章の「東アジアのなかの日本列島」では、五～八世紀の東アジアの情勢と日本との関わりについて述べている。朝鮮半島との関係では、五世紀の朝鮮半島は、倭にとって資源と文化の依存先であるとの認識から、国内統治に必要な武具製作のために、不足していた鉄資源を依存していたと述べ、さらに木簡についても、奈良の平城京跡から多数出土しているものと同様のものが、韓国でも出土例が増えていることを紹介し、日本では荷札木簡の上端に切り込みを入れたものが多いなかで、七世紀末～八世紀初頭には、下端だけに切り込みを入れたものがあり、これと類似したものが加耶地域から発見された六世紀半ばのものに多いことから、日本の木簡文化も朝鮮半島から伝わったものであると述べている。また、漢字や文章表現でも、中国になく、日本にみられる漢字や文章表現に、語順が同じ新羅語と共通したものがあるのは、日本語を漢字で記す方法が、最初は朝鮮半島で行われた方法を取りいれながら行ったためであるとし、すべて中国一辺倒と思われがちな日本の漢字文化の採用も決して単純なものではなかったことを述べている。しかし、大宝律令以降では、日本では制度が大きく変化していると指摘し、たとえば、年号の採用や都を長安の都城制に倣うなどのほかに、それまでの地方行政単位の「評」は朝鮮半島の行政単位の名称であったが、中国で使われた名称の「郡」に変えたり、官人の身分を示す冠位も位階とし、徳目を示す漢字の冠位から数値によって上下関係を示すものに変えていることから、八世紀初頭において、これまでの指向性が朝鮮半島から唐へと大幅に変化したと述べている。その他、遣唐使による唐との関係、新羅使・遣新羅使による朝鮮半島との関係、さらに渤海使による新興国渤海との関係等についても述べ、そのなかで日本海を直接、横断して東北や北陸地方の沿岸へ来着した渤海使の蝦夷との接触にもふれている。

第三章の「「日本」の内と外」では、日本と外国との関わりのなかで、その主体者である人々の問題を取り上げている。五世紀以降、百済から渡来した渡来人・帰化人によって、陶質（とうしつ）土器（須恵（すえ）器）の生産、鍛冶・機織り・木工などの高度な技術、そして仏教文化がもたらされ、寺院建築に不可欠な寺工、金属部品の製造、造瓦・画工などの技術者も渡って来たこと、そしてまた、陸奥国の産金遺跡の発見には彼らの子孫が大きく関わっていたことも述べている。また、これとは逆に、遣唐使として唐に渡ったあと、唐で生活し一生を終えた留学生・留学僧についても思いを寄せ、また、外交上必要な漢語などの外国語の通訳の養成やその実情にもふれているが、このなかには日本語習得のために新羅から「学語生」が派遣されていたという興味深い記述もある。また、列島内の外国

である、いわゆる辺境地域における日本と蝦夷社会との関わり、城柵官衙の設置による支配過程、そして九州南部の隼人社会、さらに、より南の島々との交流等についてもふれている。

第四章の「国家と役人」では、国家の諸制度の確立に伴い整備されてくる役人関連の制度を中心に、具体的に述べている。服装から作法、勤務の仕方・勤務時間等、上級職員・下級職員、技術者の確保、職員の出世、文書のもつ意味、文字の練習、戸籍制度・はんこ、軍隊の設立、そして仏教の興隆、地方行政等である。このなかで、文書については、出土する木簡によって、文書の様式が大宝律令の前後では、中国風に変わってきていること、また地方から届けられる各種の報告書の量が膨大なものとなってきたため、文書のチェック・整理・保管等、役人の事務量が膨大に増えたこと、また、中央に提出する文書には紙が使われたが、紙以前からの木も多量に使われていたことを述べ、木簡や紙の使い方、紙の貼り方、送り方についても述べ、さらに、当時の役人の文字練習（習書）用として、『論語』・『千字文』等が流布していたことなどを述べており、公務員生活を長くしてきた評者にとっては非常に身近で興味深い内容となっている。また、戸籍制度を導入したのは、六六三年の白村江の戦いで倭が救援した百済軍が唐・新羅連合軍に大破したことを受け、強固な国家を作るために兵士の確保が必要となったからであるとし、人々から兵士を徴発する徴兵制を導入し、諸国に軍団を設置したこと、また、七世紀以降、国家支配維持のためのイデオロギーとして、国家が仏教を普及させていく政策をとるなかで、各地で寺院が建立され、写経事業が広がっていく経緯を述べている。

第五章の「万葉びとの生活誌」では、『万葉集』などの文献や考古資料に基づき、衣・食・住、子供の誕生、子供と社会、名前のつけ方、人々への賦課、春～冬の過ごし方、文字の普及状況、人々の遊び、病気への対処、仏教と信仰、まじない、葬送等について具体的に述べている。このなかで、庶民の当時の一日の食事は朝夕二回であり、一回の食事は主食と一汁一菜程度とあったとし、主食の米・雑穀のほか、野菜・魚介・調味料・食器の内容についてを述べ、名前のつけ方では、男性には「〇〇まろ」、女性には「〇〇め」が多く、この音に合わせた用字がある。また、動物にちなむものが多い。また、人々の負担では租・庸・調・雑徭（ぞうよう）のほか、出挙（すいこ）（稲の貸し付け）などの負担も大きかったことを述べ、その負担に耐えられなくなった逃亡・浮浪の者が頻発し、労働者などとして各地へ流れる現象が生じた旨述べている。また、文字では、八世紀の遺跡から出土する墨書（ぼくしょ）土器については、まじないの土器であって、文字は当時の庶民にとってはまだ記号的な側面が強く、都周辺はともかくとして、日本全体では、まだ集落に文字は普及していなかったことを述べている。ちなみに、本県では、九世紀以降になって、墨書土器が次第に増加している。また、当時の遊びでは、双六（すごろく）や囲碁などの大人の遊び、独楽や竹とんぼなどの子供の遊びについて述べ、死と葬送では、仏教普及とともに土葬一辺倒のなかで火葬が普及していく状況を述べている。

最終章の第六章、「開発と環境問題」では、古代に行われた開発工事について述べ、中央だけでなく地方豪族が行った地域の開発の実情にもふれている。また、駅馬制の実情についても述べ、七世紀後半には幅

十二メートルにも及ぶ大規模な直線道路が建設されているが、これは駅馬の通る道ではあるが、軍隊の通る道でもあったと述べている。また、八世紀前半には、平城京のみならず地方でも国府関連の建設が盛んに行われ、平城京をつくる際に、それ以前の古墳を破壊している事実をあげ、都市建設が最優先された状況も述べている。また、これに伴いゴミ・排泄物の問題など新たに都市の衛生問題が発生し、さらに、都市建設に伴う建築用木材の大量伐採によって、森林破壊が増長し、製塩・須恵器製作用の薪をめぐっては、山林争いが発生するなど、古代国家の生産・流通が立ちゆかなくなりつつある状況を指摘している。

以上が本書の概要である。つぎに本書への私見を述べてみたい。

本書は律令国家形成期の国家と国民の生活について、わかりやすく述べたもので、従来、この時代を扱ったものには、どちらかと言えば政治史的立場で述べる場合が多かったように思われるなかで、本書はこれを意識的に排除している。この時代の日本という国の形成過程、わが国のおかれた国際的状況について、わかりやすい項目仕立てで述べ、さらに、当時の人々の生活については、国を支配する側の公務員の生活だけでなく、支配される側の農民の生活等についても具体的に述べ、しかも双方の側の人々のもつそれぞれの苦労・悩みといった心の部分を感じさせる記述なども行っている。また、国家が形成されていくなかで生ずる自然破壊といった現在に通ずる矛盾点についてもふれており、いまの私たちにとっても非常に親しみやすいものとなっている。

このわかりやすさ・親しみやすさの工夫は、本文以外にも随所に配される写真や図からもわかる。使われた図版数は、文献資料にくらべ発掘調査による出土品や遺構のほうがはるかに多い。その多くは、当然のことながら著者ご専門の出土文字、とくに木簡や漆紙文書が占めてはいるが、それ以外のものも多く、歴史を身近に感じさせる配慮がみられる。

著者が「はじめに」のなかで述べた、律令国家が形成されていく過程のなかで、「人々がどのような生活をし、時代がどのような方向へ動かされようとしていたのか」を意識して考えてみたいとする姿勢は、本書にじゅうぶん活かされていると言えよう。

そのほか、第一～五章の各章終わりには、コラムとしてそれぞれ、奈良時代の人口、石造りの都、外国からきた動物、富本銭（ふほんせん）と和同開珎等を配し、最近の発掘成果なども取りいれて興味深く読ませる工夫がなされ、さらに巻末の参考文献・索引・年表も読者にとって非常に親切である。

ところで、本書を読むに当たって、評者はこのような一般的なみかたとは違ったみかたで、実は読まさせていただいた。それは、著者が古代において、律令国家の支配が及ばなかった青森県域などの「化外の地」がどのように扱われているのかといった点であり、評者がこれまで、その地域で遺跡調査に関わってきたということとおおいに関わっている。

この問題は、本書の第三章に十頁にわたって取り上げられており、実はほっとした。評者の住む青森県など東北地方北部地域が、あまり取り上げられていないのではないかという不安があったからである。しかし、これは杞憂であった。本県域等に当時住んでいた「蝦夷」の問題については、『日本書紀』の「斉明紀」（七世紀後半）にある阿倍比羅夫の北上に始まる蝦夷支配の過程で述べられている。著者はこのなかで、従来の

蝦夷は国家の征討対象として記述されることが多く、絶えず戦争状態であったと思われがちであるが、実は、日常は武力による威嚇を必要とする場面はそう多くはなかったとし、八世紀後半には次第に城柵官衙を中心とした移民と蝦夷の共生する社会が形成されるようになっていたと述べているのは、評者の乏しい考古学的知識に照らしても、無理なく納得できるものである。また、このなかで、たとえば本県の八戸市丹後平古墳群や同古墳群出土の大刀柄頭・和同開珎等、さらに、東北地方の蝦夷社会についても各地の城柵官衙遺構などの考古資料を多用していることからも、この地域重視の姿勢を読みとることができる。

さて、本県では、近年、八戸市やおいらせ町など県南地域を中心として、七世紀後半以降の飛鳥・奈良時代の須恵器や馬具類、位階を示す石帯の出土、さらに県内各地で九世紀以降の馬産を思わせる馬歯・骨類の発見例が増加している。また、青森市朝日山（二）遺跡では奈良時代の唐式鏡（伯牙弾琴鏡）、同市新田（一）遺跡では平安時代中期とされる木製馬形などの祭祀具がまとまって出土し、さらに木簡といった従来まったく予想されなかったものも出土するなど、十年前までとはかなり違った状況になってきている。本州北端の地にも、このように律令社会と類似した出土品が少しずつではあるが増えており、律令社会との関わりがどうであったのかあらためて注目されるようになってきている。

しかし、律令国家や社会と言ってもその内容については、正直なところ、日常的に接することがない私たちは、知らない部分が多すぎるわけで、この点、一冊でわかりやすく記述された本書は、非常に参考となるものである。そしてまた、この時代の東北地方北部の社会背景を考えたり、歴史像を描くうえでも、多くの示唆を与えてくれるものである。

このように、本書の内容等については申し分がないわけであるが、あえて探すとすれば、非常に些細な点で恐縮であるが、百十頁の中国吉林省の集安市にある有名な「高句麗好太王碑」写真である。他の書籍にも使われる写真であるが、実はこの八月に現地で見て来たばかりである。現在はガラス壁の鞘堂のなかに立っている状態であり、写真のような状況はもう見ることはできない。この点は、著者ご自身はすでにご存じかと思うので、何らかの説明があったほうが、誤解がないのではないかと思われる。

さて、最後になってしまったが、本書を執筆された鐘江宏之氏は、現在、学習院大学准教授であるが、実は、ご存じのかたも多いと思うが、平成八年から十五年までは弘前大学人文学部で古代史を担当されていた研究者である。木簡や漆紙文書など遺跡出土の文字資料を専門とされ、文献資料がほとんどない本県において、平安時代等の遺跡から出土する墨書土器や刻書土器の文字資料に注目し、その研究成果を『新青森市史　資料編１　考古』（二〇〇六年）や『青森県史　資料編　古代２　出土文字資料』（二〇〇八年）においても執筆されるなど、本県とは非常に深い関わりをもった研究者であることもまた付け加えておきたい。

本書は、わが国古代の歴史に興味をもたれる方々はもちろんであるが、本県など東北地方の古代史に関心をもたれるかた、そして考古学・埋蔵文化財関係のかたにも一読を勧めたい一冊である。

（Ａ５判、三六六頁、二〇〇八年二月、小学館、価格二五二〇円）

（ふくだ・ともゆき　前青森県立郷土館副館長）